

SPring-8 の完成に際して

高エネルギー加速器研究機構

物質構造科学研究所

木村 嘉孝

SPring-8では実験施設が完成し、本年10月からいよいよ共同利用実験が始まろうとしています。外部からではありますが、計画当初から加速器を中心にいろいろな場面で計画の推進に関わらせていただいたうちの一人として、まことに感慨深いものがあります。

最初、本計画と内容的に近い米国のAPS計画の先行を心配する向きもありました。しかしAPSの現状とSPring-8計画の、予想を上回る順調な進展を見ておられますと、放射光の最先端研究において、近くSPring-8が世界をリードする日が来ることは最早疑う余地がないように思われます。計画を直接推進してこられたスタッフの方々、ならびにその指導のもと非常に高性能の装置の製造にあられた民間企業の技術者の方々に敬意を表する次第です。

さて、長く共同利用機関に在籍し、そこでの研究活動に携わってきた立場で申しますと、最高性能の大型装置が完成し、利用研究が順風の船出となりましても、その勢いを長期にわたり持続することは余程難しいように思われます。これまで内外のいろいろな共同利用機関の消長を見てきました。またそれが何によって左右されたか、要因は様々です。しかし間違いなく言えることは、成功している機関では、外部ユーザーによる利用研究と、内部スタッフが開発などと並行して行う利用研究、いわゆるインハウス研究が、ともに、高いレベルで推進されているということです。

KEKでは、素粒子・原子核関係分野と、放射光・中性子・中間子科学など物質関係分野の、非常に対照的な手法と形態による共同利用研究が行われています。そして、今、前者では共同利用に参加する大学チームの強化が、一方後者ではインハウス研究の強化が問題として取り上げられ、検討が進められつつあります。実際、PFでは1995年の外部評価でこの点について強い指摘を受けました。

インハウス研究の強化のためには、内部スタッフの充実と、内部スタッフのイニシアティブによる研究の推進という課題に取り組まねばなりません。問題はこれらを共同利用研究の活性を損なうことなく具体化することです。PFでもこの方針に沿ったいくつかの試みがなされようとしています。ここでその内容にまで及ぶことはできませんが、この場合重要なことは、インハウス研究といえどもユーザーコミュニティの十分な理解を得ながら進めるということではないでしょうか。いずれにしろ、共同利用機関にとって、共同利用研究とインハウス研究は車の両輪のようなもので、互いに建設的な影響を及ぼしあえる状況にして行かねばならないと考えています。

SPring-8は今まさに研究活動がスタートしようとしているところですが、我が国を代表する研究機関の一つとして、その発展への期待は今後ますます高まってくることでしょう。そこで、研究の推進に直接あたられる方々にとって先刻ご承知のことであろうかとは思いましたが、共同利用研究とインハウス研究のバランスについて、KEKを例に一言述べさせていただきます。